Case Study
支部ケース・スタディ
東海支部

インハイ.tv
～三重県ケーブルテレビ協議会の取り組み～

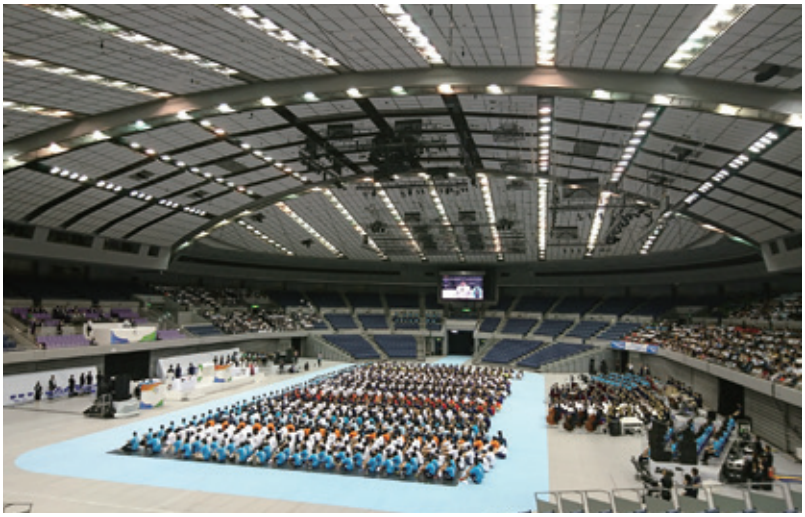
三重県ケーブルテレビ協議会

制作委員会 委員長
近藤　均
（(株)ラッキータウンテレビ 常務執行役員）

高校生スポーツ最大のイベント「インターハイ」

2018年の夏、全国高等学校総合体育大会（通称：インターハイ）「2018彩る感動 東海総体」が、三重県を中心に愛知県、岐阜県、静岡県、和歌山県で開催されました。インターハイは、言わずと知れた高校生スポーツ最大のイベント。全30競技に約3万6,000人が参加し、高校生ナンバーワンの座を競って熱戦が繰り広げられました。ケーブルテレビにとっても、高校生アスリートへの取材などを通じ、身近なイベントと言えるでしょう。

この大会を盛り上げようと、2014年から「インハイ.tv」という全国高体連公式インターハイ応援サイトが運営されています。このサイトは、インターハイの特別協賛企業でもある大塚製薬株式会社様が運営し、インターネット回線を利用して、全競技会場から臨場感あふれる全ての競技・試合のLive中継やハイライト映像、試合結果などを配信しています。全30競技の映像などが無料で見られ、特に、大会期間中は、選手のみならず、選手の家族、関係者などを含め高い注目を集めています。



2018年のインターハイでは、三重県ケーブルテレビ協議会がこのサイトの運営の一部に携わることになりました。

総合開会式の様子

インハイ.tv
～三重県ケーブルテレビ協議会の取り組み～

三重県ケーブルテレビ協議会

「インハイ.tv」との関わり

ケーブルテレビ局と「インハイ.tv」との関わりは、2017年からです。

その年に山形県を中心に開催された「南東北総体2017」で、山形県米沢市に本社がある株式会社ニューメディア様が、このサイトの運営に参加しました。山形県、宮城県、福島県、和歌山県で開催される全競技をインターネット回線を利用して、Live中継や試合結果などを各競技会場から配信しました。撮影技術もさることながら、運営者である大塚製薬株式会社様より、安定した配信体制やきめ細かい対応が高く評価され、今回の「2018年東海総体」へとつながりました。

成功の“鍵”は、地域の協力

実行するにあたり、日本ケーブルテレビ連盟東海支部の中にインハイ.tv運営委員会が設置され、その下に各県単位のワーキンググループが作られました。三重県で行われるのは、総合開会式を含め14競技。他県と比べ、最も多い競技数です。三重県ケーブルテレビ協議会では、開催される競技会場をサービスエリアとするケーブルテレビ局がその競技を担当することを基本とし協力することにしました。

そして各局が取り組んだ業務は、3つ。「試合を開始から終了までインターネット回線を利用してLive配信する」「試合の途中経過や結果をTwitterなどでサイトへアップする」「VOD用に試合を収録する」。一見、コミュニティチャンネルを運営しているケーブルテレビ局には、それほど難しくない業務にみえますが、インターハイ全体で9,000を超える試合数に加え、200台を超えるカメラ台数と交代要員を含めたカメラマンの確保など、大会前から負担が大きいことが想定されました。競技数が多い三重県では、局によって複数競技を担当することから人員の確保が最大の問題となりました。そこで、前回の「南東北総体2017」の実績を踏まえ力を入れ求めたのが、地域の方々の協力です。カメラ1台に対し、カメラ担当2人、情報発信担当1人の合計3人を配置する想定で、三重県だけでも600人を超える応援が必要となり、アルバイトとして、協力してもらえる方を局ごとに公募しました。実際に応募して下さったのは、学生、主婦、定年退職を迎えた方など経歴は様々でしたが、各会場の取りまとめ役となるリーダーを局の社員が担当し、実際の業務を地域の方にお願いしました。業務の大部分を任せることになりましたので、いかに我々と地域の方がうまく連携するかが成功の鍵を握りました。そのため各局では、事前に説明会を開催して、協力者に業務内容はもちろん、カメラの使い方、情報発信の仕方などを習得してもらいました。そして初めての経験という不安を抱きながらも、万全の準備で本番に臨むことになりました。

インハイ.tv撮影機材設営状況

ケーブルテレビのノウハウ＋地域の方の実行力

本番当日、各会場はスポーツ競技の独特の緊張感に包まれていました。朝早くからLive配信に向けた準備に取りかかる姿は、生中継の特番に挑む姿そのもの。試合を配信するにあたり、ケーブルテレビのノウハウが大いに生かされました。試合開始前の時間を使いリハーサルを兼ねて撮影方法をおさらいし、初めて経験する人には、スポーツ撮影のコツや収録するSDカード交換のタイミングなど実践に応じたアドバイスをした局もありました。地域の方が主体となり、社員スタッフが支えながら撮影を行うことで結果、大きな問題もなく試合の配信を行うことができました。またTwitterなどで試合の途中経過や結果を速報する情報発信業務では、情報の伝え方を教えただけで、我々が想定する以上の内容で情報を発信いただけました。こまめに情報をアップしてもらったおかげで、高校生たちの熱気を伝えることができ、全国の保護者や関係者から感動やお礼のメッセージが返信されました。本当にアルバイトの方々の実行力には驚かされました。結果的に、昨年度を大幅に上回るサイト視聴数を獲得でき、インターハイの盛り上がりに貢献できたのではないかと思います。

地域の方々による撮影状況

ケーブル連合の強みを発揮できる仕組みづくりへ

今回の取り組みを通じて、全国規模のイベントにケーブルテレビ局が連携できる可能性を感じました。特に今回のような全国各地で持ち回り開催されるイベントは、1つ仕組みを作れば、それを開催地のケーブルテレビ局などと連携して行うことができます。地域に根づいたコンテンツ制作に加え、全国規模のコンテンツ制作を“オールケーブル”でできれば大きなプレゼンスになる手応えを感じました。

今回の「インハイ.tv」での取り組みが1つのモデルケースとなり、ケーブル業界の新たな強みに変えるきっかけになればと思っております。